

「こいつ、男の子に間違えられるけど、夕子という名前で女の子だから間違えないようにな。三歳になるというのにまだ、寝小便是するし、他人の前ではぜったいに口をきかんし、手間がかかってしょうがない出入れようかとしたんだけど、なにしろ九州まで行くのには旅費がかかる。それで、近場のじいちゃん、ばあちゃんが面倒をみてくれないかと思って連れて来たというわけなんだ」

天井の蛍光灯がジーという音を間断なく出している。清の余りに勝手な言い草に今度は徳平が堪らずに言った。

「清、おまえな、わしらが二階から降りてこんかったら、この子を黙ってここに置き去りにしようとしてい

たな。ええ年になってもおまえの無責任な性格は相変わらず直つとらんのか」

清は図星をさされたようで、苛立った声を出した。「なんだよ、二人ともじい、ばばあになつたら急ぐ口うるさくなりやがって。俺が家出するまではほつたらかしてしておいたくせに、突然に説教とはふざけるのもいいかげんにしろ。この子をここに置き去りにしてなにが悪い」

徳平夫婦は清の居直つた言い草が情けなく、あきれ二の句が継げなかった。

徳平は「まさか」と思っていたことを口にしたのだが、どうやら清は本気で三歳の子どもを黙つてこの暗い店に置き去りにしようとしていたのだ、と思うと唖然とした。二人が黙り込んだので、その間を利用し

て清は一人でへらへらしやべつた。

「法律上の書類や夕子の下着や服なんかはこの袋に入っている。当分はそれで間に合うだろう。とにかく、俺は好きに生きてきたのだから、これからも自由に生きていく。じゃ、後は勝手にしやがれ」

清は陰険な目をしてこう言ったかと思うと、がたがた戸を乱暴に開けて外に出た。

徳平は「おい、清」と叫んで後を追った。清は西方角に走って逃げた。徳平は後を追ったが、あわてて下駄を履いてしまったのでうまく走れない。すぐに息が切れてきた。息切れしながらも必死で声を出した。

「ま、待て、清、まだ話はすんどらんやろ。今の今まどこで、何をしておった。おい、待て。これからどうするんや。あの子を捨てて平気なんか」

二人のほかには誰もいない薄暗い商店街の外灯が路面を照らしている。徳平の下駄の音が深夜の商店街にカンカンと響いた。清は逃げ足が速く、またたく間に闇の中に姿を消した。徳平は心臓が止まるかと思うほど懸命に追いかけたが、昨日橋の手前で突然、バタンと転んでしまった。徳平はしばらくそのままアスファルトにうつ伏せになっていたが、やがてのろのろと身体を起こした。顔に手をやると、血がついていた。そうとうあちこちをすりむいたようだ。やつの思いで立ち上がったが、下駄の鼻緒が切れているのに気付いた。しかも、もう一方の下駄は歯がひとつ折れていた。

徳平は悄然とした思いで片手に鼻緒が切れた下駄を持ち、肩をすぼめて、かくん、かくんとひよろつき

ながら来た道を引き返した。

後味が悪かった。清が泥棒のように「こそこそと現れたので、びつくりしたのと何十年の心配とが思わず敵しい非難となって口から出てしまったが、もっと冷静に対処していれば売り言葉に買い言葉とはならなかったのではないか。それとも、かつて会話のなかつた親子が、初めて互いに思い切り言葉を投げつけたことを「まし」と取るべきなのか。

だが……と徳平は思った。そんな二つの選択肢など最初からなかったのだ。清が家に居た頃から二言以上の会話などしたことがなかった親子が、あの状況で『冷静に対処』などできるわけがなかった。

清には全くこちらに取り合おうとする様子はいかえなかったし、清の心の荒み方がよくわかった。

短期の記憶がなくなるという問題を抱え始めている。何十年もたつて急に現れた息子の清のことなどを持ち出したりして榮治を混乱させたくなかった。八百徳にたどり着き、下駄を片手に開けっ放しの戸から入って鍵をかけた。

「清に追いつかんかった。あれはもう駄目や」ふと見るとかみさんは小さなパジャマを夕子の身体に当てて、合うかどうかを試している。

そのパジャマが幼児の頃の清のモノだと気付いた徳平は、かみさんの物持ちのよさにあきれると同時に、怒りが込み上げてきて思わず怒鳴った。

「おい、つまらん真似をするな。そななモン、着せるな」

するとかみさんは立ち上がって店に降り立ち、すり

清が暗闇にすつと姿を消したように、親子間の関係修復の時期をいつの間にかすつと通り越してしまっていたのだ、と感じざるをえなかった。

徳平はうつむいてかくん、かくんと深夜の商店街を歩きつづけた。栄屋の店の前に来た。

栄屋の自動販売機が薄暗い商店街の中で明々と輝いている。この「わっ」と泣き出した気持ちは栄屋の榮治に聞いてほしかった。

栄屋の二階を見ると真つ暗で、榮治が寝ているのは確かだった。徳平はベルを鳴らし、榮治をたたき起こしてでも話を聞いて貰いたい気持ちに駆られた。ベルを押そうとしたところで、ぐっと思いつまった。何でも悩みを聞いてくれた榮治だがこの出来事だけは甘えたらいけない、という気がしたからだ。それに榮治は

ガラス戸を閉め、声を落としてきつぱりと言った。

「いくら腹が立つといつても、幼い子どもの前でそんな態度はいかんよ。汚れた服のまま寝させるわけにはいかんでしようが。清のパジャマを着せるのは今晚だけや」

かみさんは徳平がけがをしているのに目を留めた。しかも片一方しか下駄を履いていない有様だ。

「あれ、あんた、けがをしとるやないか。転んだんやな。今からまた、お風呂を入れるで」

「い、今からか。もう真夜中やぞ」

「温水器やお湯を出すだけでええんやから簡単や。あんた、その傷を洗うて消毒せんといかんぞ。それにあの子も随分とお風呂に入つてないようやからな」

元来が穏やかな氣質の徳平は、こうかみさんから論

されて、怒りの気分は段々と収まってきた。

「さてと、そのわしらの孫らしい夕子という子どものことやけど、どうしたもんかの」

『『どうしたもんかの』て、あんた、ほっとくわけにはいかんで。ウチらで夕子ちゃんを育ててみるわ』

かみさんが余りにあっさり言ったので徳平は慌てた。

「そんな、わしらは七十過ぎやで。今から子育てするなんてことがでけるかいな」

「でけるよ。荒物屋の婆さんも航平ちゃんを一人でみてるでしょうが。七十で孫の世話をしとる人はなんぼでもおるわ。あたしは健康やし、あんたは暇でしようがないんやろ。孫をみるちゆう仕事ができたら、気持ちも明るなるし、気分も変わるといもんや」

かみさんはすっかりその気になって、なんだかうれ

しそうだ。しかし、徳平はかみさんのように簡単には気持ちの切り替えができなかった。今さっきの清の有様から碌な生活は送っていないな、と推察し、情けない気持ち拭えなかった。清にまったく追いつかず、惨めに転んでしまったことも悔しかった。

「清のことやけど、あいつは根っから腐つとる。わが子を捨てようなんて、言語道断や」

「今さらそんなことを蒸し返してもしようがないやろ。5四十過ぎの男をどうにかしようとしても無駄や。うちちやつておきまい。知らんところに捨てるより、ウチらのところに連れて来たということをましと思わんな。清もあたしらの前では虚勢を張ったんや。『お願いします』と頭を下げるのが絶対にできん子やからな。でも、心の中では『頼みます』と思うとったかもしれ

ん。あたしにも理想的な親だったとは言えんしの。それよりあの子は可愛いやないか。夕子ちゃんて、ええ名前や」

「そうか？ わしはようわからん」

「なあ、あんた。清が子どもに名前を付ける時に、この夕焼け通り商店街のことを思い出して『夕子』とつけたんと違うやろか。きつとそうや」

かみさんは風呂を入れに奥に入った。

徳平は清の荒廃した雰囲気を感じ出して、とてもかみさんのようには楽天的になれなかったが、しかし、なるほどかみさんのように考えてみるとほんの少しだけほっとするものがある。それにしてもかみさんの割り切り方にはつくづくあきれてしまった。

(以上3月5日放送分)